

服部讓二（指揮、バイオリン）

1969年東京生まれ。8歳で家族と共にウィーンに移り住む。ウィーン・フィルのトップメンバーたちと室内楽を楽しみながら育ったことが、その後の音楽観の形成に大きな影響を与えた。ヴァイオリンをライナー・キュッヒルのほか、ミシェル・シュヴァルベ、ウラディーミル・スピヴァコフに師事。またユーディ・メニューインとの交流は音楽面のみならず、人間的にも広く深く影響を受けている。20歳でイギリスのメニューイン国際ヴァイオリン・コンクールで第1位、同時にバッハ賞・聴衆賞を受賞。92年、第3回新日鉄音楽賞“フレッシュ・アーティスト”を受賞。

ヴァイオリニストとして国際的に活躍後、2002年に第1回マゼール・ヴィラー指揮者コンクールにおいて“リンカーン・マゼール・フェロシップ賞”を受賞、カーネギー・ホールでのデビューを果たす。これを機に、指揮者として本格的に始動。

2004年よりウィーン室内管弦楽団の正指揮者に就任し、ウィーン・コンツェルトハウスでの定期演奏会のほか、スイス、フランス、南米、インドなど、海外ツアー公演でも成功をおさめ、2018年以来同楽団の首席客演指揮者。また2014年から2018年まではスペインマジョルカ島パルマ市のバレアリック・シンフォニーオーケストラの常任指揮者兼コーアーティスティックディレクターを務めた。そのほかウィーン交響楽団、フィルハーモニア管、BBCコンサート・オーケストラ、スロヴァキア・フィル、デュッセルドルフ交響楽団、読響、札響、関西フィルなどを指揮している。また、これまでマリア・ジョアン・ピリス、ピョートル・アンデルジェフスキ、エリザベス・レオンスカヤ、ニコライ・ズナイダー、ジュリアン・ラクリン、ゴージェ・カピュソン、ファン・ディエゴ・フローレス等数々のトップアーティストと共演している。

オペラ指揮者としては、2004年、ウィーン室内歌劇場のモーツァルト「偽の女庭師」でデビュー。2005年に新国立劇場の小劇場にレオンカヴァッロ「ザザ」（日本初演）で初登場、2006年には同大劇場で指揮した。2007/08シーズンにはドイツエアフルト歌劇場の第1カペルマイスターを務めた。2009年にはウィーン国立歌劇場にてモーツァルトの「魔笛」を3回指揮し、好評を博す。更に2009年夏以来、オーストリア・キットゼー・サマーフェスティバルの音楽監督を務めている。

その他、メニューイン国際ヴァイオリン・コンクールの会長及び審査員。2003年よりイギリスの王立音楽院の名誉会員。2003年から07年までは同音楽院の客員教授を務めた。また、他分野への関心も高く、オックスフォード大学で、社会学を学んで以来、ナショナル・アイデンティティの研究を続けている。

2015年からウィーンにて高級日本料理店SHIKIの経営も行なっている。